

ることにより得られるシステム最適化へのアイデアにつながり、これが他のOR技法の利用・普及・発展につながる可能性を十分秘めている。

4. おわりに

今回実施した調査の結果、シミュレーションが最もよく使われているOR技法の1つであることが再確認された。シミュレーションによる分析を必要とする問題の増加とシミュレーション作業の効率化を可能にする強力なシミュレーション言語の普及・発展によってシミュレーションが今後ますます使われるようになると、言語の特性分析やアニメーションの有効活用法等の今まであまり検討されなかった新しい研究課題が生まれてくる。

〔謝辞〕 アンケート調査にご協力いただいた各

機関の関係者の方、および菅沼陽史君に謝意を表します。本研究は早稲田大学特定課題研究(61B-8)の助成を受けました。

参考文献

- [N1] 中西俊男, 「コンピュータシミュレーション」, 近代科学社, 1977年
- [N1] 中西俊男, シミュレーション言語の新しい動向, システムと制御, 29(11), 706-713, 1985
- [S1] Catlog of simulation software, *Simulation*, 47(4), 152-165, October 1986; 48(2), 69-73, February 1987.
- [V1] 矢崎義行, 他, 「パソコン版ダンブトラック運行シミュレータの開発と走路区間のモデル化」, オペレーションズ・リサーチ, 1987年5月号

●ミニミニ●

●OR●

トラブル・シューティング型の問題解決 (I)

世に行なわれる問題解決法には、いろいろな流儀がある。わがORもその1つと考えるが、もう少しの絞って、トラブルが起こったときに、その原因をつきとめるというタイプのものがある。トラブル・シューティング型の問題解決法である。最近、筆者自身これを体験した。この顛末を述べて参考に供したい。

ワード・プロセッサ、俗にワープロと称する代物、技術的には、まだ到底完成の域には到達していない商品と見るが、その効用はめざましい。筆者の所でも一昨年末、A社製の熱転写式印字装置のついたポータブル・タイプのもを購入した。当時10万円程度の機械である。以来1年半、大いに利用した。

ところが、新しく紙をセットすると、その第1行から第2行にかけて印字が不完全なことがたびたびおこる。それも常というわけではなく、ときどき起こるのである。筆者は最初紙に原因があるものと考えた。紙の上のりなどが付着してそのままかわくと、見た目にはわからなくてもインクがのらない。そんなトラブルだと考えたのである。筆者が使っていた紙はワープロ用として市販されている、大

手製紙会社B社の製品で、白土を塗布したやや厚手のつやのある紙であった。塗布の工程に問題があったのではないかと？

紙を購入した売店を通じて連絡すると、販売元のC社から回答があった。「それは紙のせいではなく、機械のせいだと思う」とのこと。もっとも、この販売元はB製紙会社から紙を購入して、断裁機(ギロチンという)でA4版の大きさに裁断、袋づめて販売している会社である。

とにかく今度はワープロのメーカーに連絡した。営業担当者のいわく「そんなもの、リセット・ボタンを押せば直りますよ」とのこと。

大概のワープロにはメモ機能というものがある。普段よく使う語句、自分の住所氏名等はこれによってワープロに記憶させておけば、ごくわずかのボタン操作によって取り出せるようになっている。筆者のワープロにもこの機能がついているのだが、リセット・ボタンを押すとメモの内容が消されてしまうようになっている。だから、筆者としてはリセット・ボタンは押したくない。しかし、トラブルが防げるのならと思い、止むを得ずボタンを押したが、事態は一向に改善されなかった。(P.280へ)